

## 書 評 ・ 紹 介

James A. Sweet and Larry L. Bumpass,  
*American Families and Households*

Russell Sage Foundation, New York, 1987, xxxii + 416pp.

本書は「1980年アメリカ合衆国の人口」と題されたセンサス・モノグラフ・シリーズのうちの1冊で永年、家族の人口学的研究に従事してきたウィスコンシン大学人口学・生態学センターの二人の研究者によって著わされたものである。類書としては1950年センサスに基づいてP. C. Glickによって書かれた古典的名著 *American Families* があるが、本書は最近の家族人口学の発展を踏まえて書かれた好書でいずれ古典になるかと思われる。また、著者たちが意識しているかどうかかわからないが、本書はアメリカの人口データと人口学的方法に関する入門書としても優れている。随所でデータと人口学的指標について注意が喚起されており、読んでいるうちに自然に人口学的な知識ないし考え方が身に付くようになっていく。第2章と第5章ではセンサス、人口動態統計、CPS (Current Population Survey) 結婚歴調査の結果が比較され、その差異の要因が分析されているし、第5章付録として結婚歴調査の調査票が掲載されているのも有用である。

本書の目的は家族と世帯に興味をもつ広範な研究者層に詳細な情報を簡便な形で提供するということである。本書の構成はその目的に従って「第1章 序論」のあとに「第2章 結婚」、「第3章 未婚者」、「第4章 夫婦」、「第5章 結婚崩壊の出現率」、「第6章 離死別者」、「第7章 子供」、「第8章 高齢者」、「第9章 世帯」、「第10章 その他 (夫婦以外の) 世帯一増加と特徴一」が続き、「第11章 将来にとっての意味」において若干の理論的、政策的考察が行われている。本書 (第11章) の結論として著者たちは、現在の状況は過去から将来に続く長期的トレンドの一側面であるので新たな均衡状態などと考えるはならないとし、家族には適応力があり、家族関係はアメリカ人の生活の中で重要な役割を演じ続けるが、相対的な重要性は低下し続けるであろうと述べている。

第2章から第10章までの各章では個別のテーマについて1980年頃のアメリカにおける家族と世帯の現状が明らかにされるとともに、長期的な変化と部分人口間の差異が示されている。また、世帯については第9章と第10章でまとめて分析されているほか、第8章までの各章で居住形態 (および世帯主との関係) が論じられており、書名通り世帯を重視した構成となっている。結婚とその崩壊については法律的なもののほか実態的なもの、すなわち同棲・別居についても分析を行っており、居住形態の視点から重要な情報が提供されている。さらに、1910年と1940年以降の10年毎のセンサス (サンプル) テープを再集計することによって比較可能な形で時系列データが示されているのも有用である。差異については人種・民族、教育水準、性別、年齢によるものが示されているが、人種・民族の区分が細かいことと、男子についての分析がなされていることが注目される。

しかし、本書にはセンサス・モノグラフ・シリーズの1冊として書かれていることから来る制約もある。第一に、扱われているのが主として1980年 (センサス時) 頃の状況とそれ以前の動向だということがある。第二に、P S I D (Panel Study of Income Dynamics) や N L S (National Longitudinal Survey of Labor Force Behavior) のようなパネル調査のデータが使われておらず、一部の章でセンサス局によるCPS結婚歴調査に基づく回顧的データが使われているに過ぎないことが挙げられる。これも著者たちの責任でないにしても、家族人口学においてパネル・データの利用頻度が高まっている現状からみて大きな制約であると言えよう。しかし、センサス局も数年前からS I P P (Survey of Income and Program Participation) というパネル調査を実施しており、次に類書が出版されるまでには十分なデータが蓄積され、家族と世帯の動態的な分析が可能になるものと期待される。

(小島 宏)